

ピアホームだより

2013. 11. 10

妄想と確信

我々の内なる狂気

—ロバート・フリードマン著—から

「ヒトは恐ろしい、あるいは恐ろしいかもしれない情報に直面すると、話を作り出す先天的な能力と願望を持っている。統合失調症患者の場合、作り話は一般的に妄想であり、この作り話は現実よりもっと恐ろしいことを作り出す。そして、この作り話は事態を一層悪くする。

話しを作るという能力は、自己防衛のために脳の機能の一部として発達したようである。作り話は小さな兆候を警告と捉え、それをもっと酷いものにつくり上げる。作り話は多くの事実を説明するものでなくてはならないので、耐久性も必要であり、だからこそその人が自分の作り話を確信している必要がある。

統合失調症の患者においては、感覚情報の処理機能が十分でないで、それが疑念の基

盤となり、疑念として始まったことが妄想となるようだ。知性は、通常理性を働かせ、妄想を拒む方向に働くはずですが、この場合、作り話を精巧にするのに拍車をかけるものとなり、本来知性の高い患者のリハビリが却って妨げられることになる。」との見方が示されていた。

つまり、不安、少ない情報が妄想を作るものになる。統合失調者は修正が効かないところに健常者との違いがあるということだろう。

もう少し読み進むと、その妄想の中に突拍子もない豊かな発想をみることもできるとある。

しばしば、天才と狂気は紙一重と言われますが、統合失調者の中に人の豊かで破天荒な発想を見ることが出来るのかも知れません。

自然は、人類にこの豊かな発想をするよう遺伝子を組み込んだのかもしれない。

ありあまる情報をコントロールする役目である視床下部(感覚情報処理機能)は原始的なものであり、ホモサピエンスたる発展をしていないそうです。

これが、人が混乱した状態をきたし、妄想確信を持つに至る神経学的根拠との推論があるそうです。

脆弱性は人類誰もが持つものなのです。だからこそ、統合失調症は神経生物学的過程なのです。

ピアホームに来て3カ月

山縣

ピアホームに来て早や3カ月が経ちました。私の自宅は西台ですが、ピアホームまでは自転車通勤しています。

7月下旬からの勤務でしたので夏真っ盛り。ピアホームIに行くまでの道のりにサンシティという大型のマンション群があり、そのマンションの回りは緑に囲まれていて、行きは蝉の鳴き声、帰りはひぐらしが聞こえて来て東京育ちの私はびっくり！まるで、軽井沢に来たような気分浸れ、思いがけなく通勤時間を楽しみました。

これから秋から冬へ、また、この道のりでどんな発見があるのか？ワクワクしているところです。

11月の行事

<11月10日>白石先生の交流会

<11月30日>赤塚体育館トレーニング